

不易と流行 春日正三

— 国語教育の現場で考えた —

一月二三日、文部省は、四〇年度小、中学校学力テストの中間報告を行なった。それによると「漢字の読み書き能力の中学二年の問題で、教育漢字表の学年配当表によると、小学校五年で学習する『確かめる』は、五九、七％が正答だった。『消息』は小学校四年で学習するのに二〇、九％が正答で、『静養』の『静』は小学校四年で、『養』は小学校五年で学習するのに、一六・三％しか書けなかった。また中学三年の書き取りでも『福利』は小学校四年で学習しているのに、わずか三八・五％の正答しかなかった」とのことである。

私も過日大学の学生に「彼女はソウコウがよい」という問題で漢字の書く力をテストした。正答は九二名中、四名であ

った。戦前ならば「操行甲とか乙とか」で、毎年・毎学期おしただく通信簿に書かれていたので忘れることができなかった。現代の学生には、殆んどが「素行」であった。いかに現代の世相にふさわしいと思わねばならないかと「ひにく」った。このような若者達の姿を、「敗戦後の占領政策の圧力とこれに迎合した軽薄な国情とが……」と聞いたがる。いかにも、自分自身は責任がないような言い方をする人がいるが現実には、現代に生きている我々の責任であろう。なんとかしなければなるまい。

二

「師の風雅に万代不易あり。一時の変化あり。この二つに究まり、基本一つなり。その一といふは風雅の誠なり。不易

を知らざればまことにしれるにあらざ。不易といふは、新古によらず、変化流行にもかかわらず、誠によく立ちたるすがたなり。代々の歌人の歌をみるに、代々変化あり。また新古にもわたらず、今見る所むかしみにしに不変、哀成るうた多し。是まづ不易と心得べし。又千変万化する物は自然の理なり。変化にうつらざれば風あらたまらず、是に押うつらずといふは、一端の流行に口質時を得たるばかりにて、その誠を責めざるゆへなり。せめず心をこらさざる者、誠の変化をしるといふ事なし。ただ人にあやかちてゆくのみなり。せむるものはその地に足をすべがたく、一步自然に進む理なり。

行く末いく千変万化するとも、誠の変化はみな師の俳諧なり。かりにも古人の涎をなむる事なけれ。四時の押うつることく物あらたまる、皆かくのごとしともいへり。」

これは服部土芳の著（疑いがある）といわれる赤雙子（三冊子）の冒頭の句である。（岩波・古典大系・俳論集・P三九七）

俳諧・俳論について述べるものではない。使用されている語句・特に（芭蕉の話だけに）漢語の意味は重要なことだけれども、秋自身まだ体系的に把握していないので後日に譲ることにして、ここでは、「不易」と「流行」についてこの語の意味と、学識者二・三の人達の書きことばとの意味上の距りを考え、あわせて国語国字問題の重箱の隅を突つついてみ

たいと思う。

芭蕉の「万代不易」と「変化流行」の関係は、土芳の文に示されているように、「新古によらず、変化流行にもかかわらず誠（風雅）によく立ちたるすがたなり」で「新古にもわたらず、今見る所むかしみにしに不変、哀成るうた多し」だといふ。「哀成るうた」は、日本人の魂を歌った歌である。

「是まづ不易と心得べし」で、「変化流行」は「千変万化する物は自然の理なり。変化にうつらざれば風あらたまらず是に押うつらずといふは、一端の流行に口質時を得たるばかりにて」といふ。真の「流行」は新しい時代、新しい世代の欲求も満足させるものであり、これがまた「自然の理」でもある。しかしまた一方「ただ人にあやかちてゆく」と「古人のよだれ」があり「一端の口質」がある。従ってその関係は、「四時の押うつることく物あらたまる、皆かくのごとし」であるといふ。

三

①柿は未熟で熟れていない。

②ここに小便すること堅く厳禁する。

③現代は余りにも青少年非行の類例がはなはだし過ぎる。全校生徒はこの時流に反逆して青年らしく少年らしくあらねばならぬ。

④自己の能力に対する疑問または学校の社会的評価や校舎の可否や、施設に就いての不満等、あれこれを想起して自信の喪失に堕ち入っているのではないか。

⑤諸君の勉学の態度は、あまりにも真剣味が不足ではないだろうか。

⑥健児の自覚こそ諸君に精神の鍛錬と学習への傾倒を生み諸君と共に〇〇は内外に飛躍するのである。

⑦不撓不屈の努力と精神によって、〇〇健児の精神を血と肉とその魂として誇り高き〇〇健児たらん事を誓おうではないか。

⑧文学散歩から文学遺跡研究会に前進した三十六年の大学祭に。

⑨先輩達の礎いた研究会の初心を忘れることなく、飛躍的な発展をねがうものである。

⑩諸君は真実に自己の能力の限界を確認したことがあるのか。

⑪仏教の法師として純真に、その一生を貫き通しました。純真に、強く生きぬく力、これこそわれわれの生活の原動力であるべきでしょう。

⑬新石器文化の特徴を具する縄文式土器文化。

⑭現代社会学をべっ見しながら……

⑮各執筆者とも、いまそれを咄しゃくしつつつある。

①②についてはいまさら説明する必要もなからう。③から⑦の例文には用語と措辞の問題があり過ぎる。新しいことばどころではなく、古さの中の新しさでもない。ただ漢語の簡潔を利用した口悪く言うならば文のハツタリに過ぎないと言えよう。特に③における「時流」は「青少年非行の類例」でこれに「反逆」する。いかにも尤もらしいけれども、非行が時流ということになればそれこそ一大事だ。④は「学校の社会的評価と校舎・設備についての……」であらうし、「想起」や「喪失に堕ち入って」は、書き変え、言い変えを行なってもらいたい。⑥漢字かな交り文の典型なのだろうが、漢語が正しく国語化していないということは、漢語の正しい意味が理解されないでただ並べられている。その為に文脈の乱れがはなはだしいということになる。⑦も⑧と同じで努力は精神に勝るものであることも知りたいが、もっと底辺の広い日本のことばを使ってもらえないものだろうかと思う。⑧は「散歩」は「研究会」に較べると、その価値がないように誤解される。一体学問とは何ぞやと聞き直りたくなる。⑨は「飛躍的」という漢語の魔術にかかっているのと主語を書き手が忘れている文である。⑩⑪⑫は「真実に」「純真に」という連用修飾語の使用のしかたが適当でない。⑩は、「諸君は自己の能力の限界を真実に確認したことがあるのか」の方がより正しく伝達できるだろう。ここに使用されている漢語

をやわらかい国語に言い代えて使用すればよい。⑬は「具有」だけが問題で、⑭⑮は、これこそ「変化流行にうつらざれば風あらたまず」の好例である。なんとしても言い代え、書き代えを行なうべきである。べっ見は、「瞥見」で「瞥」が当用漢字表にないのでかな書きということになった。咄しやくは「咀嚼」で「嚼」が当用漢字表にないからである。これらは前者が「一見」で、後者は「かみこなし」である。新しい時代には新しい用語が「風をあらたま」のである。

四

「広辞苑」を見ると、「不易流行は芭蕉俳諧の術語で、不易は詩的生命の基本的永遠性の体。流行は詩における流転の相で、その時々々の新風の体。この二体は共に風雅の誠から出るものであるから、根行においては一に帰すべきものである」と説明されている。この語の語源や出典についていくらか調査してあるが、紙数の制限上今回は省くことにした。

俳諧でいう「不易流行」とことばの問題・文学の問題として考えここに述べたことからは、次元は違うけれども、質は同じであると思う。

ことばは人の魂の現われであると同時に、文化の遺産である。この遺産を相続する権利と、新しい文化を生み出す義務があり、この義務を果たす努力がなされねばならない。とこ

ろが、三で述べたように、その義務を果たそうとしない。もしくは果たしていない人々がいるように思える。と申すのは、すでに生命を失ったであろうと思える漢語を手離さず、逆に新しい言い代え、書き代えのことばを使おうとしないことである。芭蕉のことばを借りるならば、「古人の誕」をなめ、「一端の口質」のみに捉らわれて、「四時の押しうつるごとく物あらたまる」ことを知らないということになる。これからの若い諸君、温古知新といこうではないか、そして正しく、美しい国語を育てようではないか。

最後に、引用した文例には、誤解もあり、曲解もあったことと思う。であればその点深くおわびする。この誤解・曲解を考慮したので、文例の出典を明記しなかった。が、学識者にこういった用語が案外多く使われているということだけは添えておかざるを得ない。

☆

☆

☆